

マレーシア派遣研修を通して、各国の体育教育の現状と課題

千葉県立流山おおたかの森高等学校 教諭 坪田 直樹

1 はじめに

私は、2010年～2012年の2年間で青年海外協力隊の一員として東アフリカのエチオピアで体育隊員として活動していた。ここでは現地のセカンダリースクール（日本でいう中学3年生と高校1年生が通う学校）で体育を担当していた。その他、休日には地域の体育教師を集め、情報交換会やセミナーを開いたりした。

現地では体育の授業はあるものの、実際に運動をすることは少なく、教室で教員が板書したものを生徒が一生懸命ノートに写すといった授業が中心だった。そこで、まずは実技の割合を増やすように提案し、実行に移した。しかし、ボールを持っていくと勝手に遊びだし、試合を始めてもルールを無視し、審判に対し文句を言う生徒ばかりだった。はじめは国民性だと思い、我慢していたが、勤務先の校長先生から生徒達のしつけをしてほしいと言われた。そこで、体育の授業を通して、人間性を身に付けさせる工夫をした。その経験から、現在でも授業づくりの際に、いかに人間性を学ばせるかが私の核になっている。

礼儀正しい、真面目、勤勉...、海外の人から見た日本人のイメージである。この日本人の国民性を築いてきたのは日本の教育が大きく関わっていることは言うまでもない。その中でも体育教育が担っている部分は大きいと考える。そこで日本とマレーシア、他の国とでは、どの程度体育教育が重要視されているか、マレーシア派遣で経験したことをまとめながら、調べてみることにした。

2 マレーシア

(1) マレーシアについて

東南アジアの中心に位置するマレーシアは、マレー半島とボルネオ島の一部・サバサラワク州から成り立っている。国土面積はマレー半島部分とボルネオ島部分を合わせ、33万338平方キロメートル。日本の面積の9割弱の広さの土地に、日本の16%の人口が住んでいることになる。そして国土の約60%が熱帯雨林で覆われている。人口約3,000万人のマレーシアは、マレー系（約67%）・中国系（約25%）・インド系（約7%）、そして多数の部族に分けられる先住民で構成される多民族国家である。各民族がお互いの文化、伝統を尊重しながら暮らしている。また、飲食店ではマレーシア料理を中心に中華料理やインド料理などバラエティに富んだ食物を手軽に試すことができる。それぞれの民族が持つ宗教、生活習慣の融合は独特な文化を生み、マレーシアの魅力を創り出している。

(2) クアラルンプールを訪れてみて

今回のマレーシア派遣に行く前の情報では、マレーシアは物価が日本の3分の1と聞いていた。しかし実際に行ってみると、クアラルンプールでは日本の物価とほぼ変わらなかった。高度経済成長期に入ったクアラルンプールでは、高層ビルがいくつも建設されており、建設途中のビルも多くあった。そして、物乞いをする人をあまり見かけなかった。

朝8時前後の通勤ラッシュ時には車やバイクでの通勤者が多く、反対に車線の数は少なく、渋滞が大きな問題となっていた。それが、仕事場に遅刻する人の言い訳になっているようだ。また、朝だけでなく、昼休憩から午後の仕事始まりにかけても、時間に関しては、ややルーズなところがあるようだ。時間を守ることが当たり前の日本人の習慣とは少し異なるように感じた。

マレーシア人の食文化も日本とは違う。まず食べる回数が3食より多い。学校交流で訪れた SMK SEAFIELD Secondary School (以下 SMK SEAFIELD 校) では、オープニングセレモニー後、11 時頃に食事が提供された。我々派遣団員の多くがこれを昼食だと思い、私を含め数名の引率教諭がお代わりも頂いた。その後、生徒の授業体験やプレゼンテーションを終えて、オープニングセレモニーを行ったホールに戻ってくると、再び食事の用意がされていた。用意してくれていた SMK SEAFIELD 校の保護者に伺ったところ、これが昼食だという。初めに頂いたものはリフレッシュメントといって、保護者はティータイムだと言っていた。日本人生徒の授業体験やプレゼンテーションが少し長引き、終了が13時頃になってしまった。しかし、そこにいた生徒はティーブレイク時に食事をしていたので、そこまで空腹ではないと言っていた。現地で生活をしている日本の方に話を伺った際、マレーシア人は食べる回数が多いため、肥満気味の人が多いと話をしていた。

(3) マレーシアの教育

① 学校制度

マレーシアの学校制度の概要について述べる。就学期間は初等教育6年、中等教育5年(前期3年、後期2年)、大学予備教育1年～1年半となっている。公立学校に通う場合、中等教育までは無償であるため、就学率は高く、初等教育ではほぼ100%となっている。

また、マレーシアは多民族国家であるため、2カ国語以上話せる人がほとんどである。授業で使用される言語については、校種や学校によって異なるようだが、学校交流で訪問した SMK SEAFIELD 校でも、マレー語以外の全教科で、英語での授業が行われているため、生徒や教員とも英語でのコミュニケーションは当たり前のようにとることができた。SMK SEAFIELD 校の生徒は7割近くの生徒が中国系のため、マレー語、英語に加え、中国語も話せるトライリンガルの生徒が多いようだ。

年齢	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
通常	幼稚園	マレーシア新学校						下級中等学校	上級中等学校		大学予科		大学						
		タミール新学校							就職										
		中国語新学校																	
マレー語を「移行」で 1年学習する場合	幼稚園	タミール新学校						移行	下級中等学校		上級中等学校		大学予科		大学				
		中国語新学校							就職										
	就学前教育	初等教育						中等教育						高等教育					

(引用：(一財)自治体国際化協会 CLAIR REPORT 217, 2001)

② シフト制

マレーシアの学校では、午前シフトと午後シフトがある。SMK SEAFIELD 校では 7:30～13:30 がフォーム 4, 5 (日本の高校 1, 2 年生)、13:30～18:30 がフォーム 1～3 (日本の中学 1～3 年生) と、午前と午後で生徒が入れ替わる。これはアフリカの国でも行われている形態である。アフリカの場合は子供の数に対して学校数が少ないために午前と午後で生徒を入れ替えている。マレーシアのクアラルンプールではその必要性があまり感じられなかったが、元々そういうものなのだろうか。

③ ICT 環境

SMK SEAFIELD 校には教室にインターネット環境が整っており、プロジェクターも備わっていた。本校がプレゼンテーションを行った化学実験室にも様々な実験用具有り、天井にプロジェクターが取り付けられてあった。化学の先生に伺ったところ、普段の授業で ICT 機材を積極的に利用しているとのことだった。

流山おおたかの森高校には持ち出し可能なプロジェクターやスクリーンがあるが、授業で使用する場合は教室に持っていき、セットしなければならない。パワーポイントや映像を使った授業は、頻繁に行われていないのが現状である。

3 体育教育

(1) 日本の体育教育の位置づけ

日本の教育は学習指導要領を基準とし、教員がそれぞれ授業を創り上げていく。小学校から中学校、そして中学校から高校と系統立てて指導するよう明記されている。今年、改訂された高等学校学習指導要領の解説、保健体育編・体育編目標を以下に抜粋する。

体育の見方・考え方を働かせ、課題を発見し、合理的、計画的な解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続するとともに、自己の状況に応じて体力の向上を図るための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 運動の合理的、計画的な実践を通して、運動の楽しさや喜びを深く味わい、生涯にわたって運動を豊かに継続することができるようにするため、運動の多様性や体力の必要性について理解するとともに、それらの技能を身に付けるようにする。
- (2) 生涯にわたって運動を豊かに継続するための課題を発見し、合理的、計画的な解決に向けて思考し判断するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝える力を養う。
- (3) 運動における競争や協働の経験を通して、公正に取り組む、互いに協力する、自己の責任を果たす、参画する、一人一人の違いを大切にしようとするなどの意欲を育てるとともに、健康・安全を確保して、生涯にわたって継続して運動に親しむ態度を養う。」

(引用：高等学校学習指導要領解説 保健体育編・体育編 第2章 保健体育科の目標及び内容 第2節 各科目の目標及び内容「体育」2目標)(平成30年7月)

日本の体育教育の目標は、学習指導要領解説に記されているとおり、単に運動量の確保や技能の獲得にとどまらない。人間性を磨くことも大きな目標の1つである。特に(3)は、人間性等の育成に向けた運動についての態度の具体的な目標を示したものである。

日本の体育では、「前へならえ」「気をつけ」「回れ右」「左向け左」等の号令がかけられることが多い。これは戦争を行っていた時代の軍隊の名残だと言われているため、賛否両論あるようだが、私はこの集団行動が1つの社会性を身につけるための訓練になっていると考える。周りに合わせることで、協調性が育まれる。これは集団で生活する上で、社会に出ても必要な力である。他にも公正、協力、一人一人の違いを大切にしようとする態度を養うことも期待されている。日本の体育教育は規律ある中で行われるが、集団行動の中で育まれる人間性を磨くことは大きなねらいの一つであるといえる。

(2) マレーシアの体育教育

① 教育局訪問

セラランゴール州教育局を訪問させていただいた際に、取り組みをプレゼンしていただいた。各学校が力を入れなければいけないものとして、STEMという目標を掲げているようだ。「Science, Technology, Engineering, Mathematics」の頭文字をとったものだと説明していただいた。国民の多くがマルチリンガルのマレーシアにとって語学力は、日常生活で多言語を使い分けることで身につけ、

学校では理系科目に力を入れているようである。教育局では、体育教育については触れられることがなかった。時間の関係上質問する事ができなかったが、体育や芸術よりも理数系の教科に重点を置いていることがわかった。

② SMK SEAFIELD 校での聞き取り調査

残念ながら学校交流中に体育の授業を見ることができなかったが、何人かの先生に話を聞くことが出来た。

- ・体育の授業は週 2 コマ（1 コマ 30 分）で、合計 60 分である。
- ・体育の内容は日本のように武道を扱うことはなく、主に球技。
- ・球技の中では、バドミントンとサッカーが人気である。

体育はマレーシアの中で、あまり重要視されていないのが現状のようだ。週 60 分しか行われず、どちらかというリラックスする時間といった位置づけのようである。マレーシアにはシラット (Silat) という武道があると教えてもらった。日本では、柔道・剣道などの武道も体育の授業で取り扱うが、シラットは体育で扱われることはなく、放課後に行われるクラブ活動でやりたい人がやるといった形のようなのだ。

(3) 各国の体育授業の取組み

① 韓国（本校の韓国人 ALT、友人からの聞き取り）

- ・体育の授業は週 1～2 コマ（1 コマ 45 分）
- ・大学受験に関係ないので、重要視されていない。

② アメリカ（本校の 2 名のアメリカ人 ALT からの聞き取り）

- ・1 人の ALT の学校では、毎日体育があった。
もう 1 人の ALT の学校では週 3 コマ（1 コマ 90 分）だった。
- ・学校によるが、高学年になると体育は選択になる。

③ エチオピア（私の経験から）

- ・体育は週 1 コマ（1 コマ 40 分）
- ・教科書があり、授業の多くは教室で行われる。エチオピア人は太陽が苦手。
- ・ほとんどの生徒はサンダル履きであるため、運動に適さない。
- ・学校指定の体操着はない。
- ・生徒は体育が好きだが、そこに規律はない。日本式の体育を浸透させることは難しかった。

4 まとめ

体育教育の重要度と人間性に因果関係があるかないかは今回の調査では何とも言えないが、日本人の「日本人らしさ」が世界で認められているのは事実であ

る。そのため、日本の教育、そして体育教育はいままでの考えを基盤としつつ、グローバル化に従い、これからも発展を続けなければいけないと感じた。

何事にも副産物がある。体育で、目的としているのは「運動技能の獲得」という産物であるが、その産物の生産過程で、「人間性が磨かれる」という他の産物が付随して得られる。そんな体育教育の可能性をこれからも実践しつつ、チャンスがあればまた世界に広げていきたいと考えている。

5 おわりに

今回のマレーシア派遣で、現地のマレーシア人と接する機会が多々あったが、私を感じた印象は、みな優しくて陽気であった。南国気質なのか、フレンドリーで子ども達も明るく、細かいことは気にしない、そんな風を感じた。そして多民族・多宗教国家であるため、民族的・宗教的な部分が人間を作っている部分もおおいに考えられる。時間にルーズな所があるそうだが、逆に日本人が正確すぎるのかもしれない。私の知る限り時間にルーズな国の方が多い。

グローバル化と言われている現代において、日本は他国と比べてむしろ遅れをとっている。先に触れたが、言語に関して英語を話せることはマレーシア人にとっては、ほぼ当たり前である。ホームステイでお世話になったバングリス村の家族とも英語でコミュニケーションをとることができた。日本語しか理解できない日本人と、マルチリンガルの人とでは、情報の量が違う。さらに多民族の中で、多文化を経験している人も適応能力に優れていると感じる。今回の研修でマレーシアを訪れ、生徒だけでなく、引率教員団も得ることが多かったように感じる。

日本に住んでいれば、快適で不自由もない生活を送ることが出来るかもしれないが、世界は考えている以上に急速で発展している。特にこれからの若い世代には、積極的にコンフォートゾーンを抜け出し、世界を感じてほしい。

【参考文献（資料）】

- ・マレーシア政府観光局公式サイト
- ・外務省 マレーシア基礎データ
- ・(一財)自治体国際化協会 CLAIR REPORT 217
- ・高等学校学習指導要領解説 保健体育編・体育編